

令和4年度（第61回）農林水産祭
第32回「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」
【地域畜産業の基盤となる大規模自給飼料生産・活用型TMRセンター】

—業績発表及びディスカッションの内容—

開催日時	令和5年2月21日（火）13時30分～16時
場所	ホテルメルパルク熊本 4階 中岳 熊本県熊本市中央区水道町14-1
主催	農林水産省・公益財団法人 日本農林漁業振興会



令和5年4月

公益財団法人 日本農林漁業振興会

発行にあたって

農林水産祭事業は、農林水産祭参加表彰行事において農林水産大臣賞を受賞された方の中から特に優秀な農林水産業者を選び、その業績を顕彰し、業績内容について広く普及を図ることを目的の一つとしています。

このシンポジウムは、農林水産祭事業の一環として、去る令和5年2月21日（水）熊本県熊本市のホテルメルパルク熊本において『地域畜産業の基盤となる大規模自給飼料生産・活用型TMRセンター』をテーマに、平成4年度農林水産祭畜産部門の天皇杯受賞者である「株式会社アドバンス」の業績を取り上げて、約50名の参加の下、開催しました。（オンラインでの配信も併せて行い約70名の方にご視聴頂きました。）

このシンポジウムでは、農林水産省大臣官房政策課の秋葉一彦政策情報分析官の主催者挨拶、熊本県農林水産部の竹内信義部長のご挨拶の後、まず、農林水産祭中央審査委員会畜産分科会（農研機構企画戦略本部研究統括部スマート農業事業推進室長）の栗原光規主査からの選賞審査報告と「アドバンス」の永田浩徳代表取締役からの業績発表が行われ、その後、栗原主査をコーディネーターとして、業績発表者にコメンテーターの中央審査委員会経営分科会分科会（日本大学生物資源学部特任教授）の小泉聖一専門委員、農研機構生研支援センターの犬下友子研究リーダー、熊本県県北広域本部農林水産部の廣瀬大造主幹の3名を加えて、意見交換（ディスカッション）が行われました。

本書は、「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」の業績発表、意見交換（ディスカッション）等の内容を一冊に取りまとめたものであり、これらの内容が普及し活用されて、今後の我が国農林水産業の振興発展に寄与することを願うものです。

最後に、今回開催にあたり、多大なるご支援とご協力をいただきました関係各位に対し、深甚なる謝意を表する次第です。

令和5年4月

公益財団法人 日本農林漁業振興会

令和４年度（第６１回）農林水産祭
（第３２回）「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」

目 次

シンポジウムスケジュール・・・・・・・・・・	1
シンポジウム出席者・・・・・・・・・・	2
受賞者の業績概要・・・・・・・・・・	3
シンポジウムの記録・・・・・・・・・・	4

令和4年度（第61回）農林水産祭

「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」（トップリーダー発表会）

【地域畜産業の基盤となる大規模自給飼料生産・活用型TMRセンター】

《スケジュール》

13:30～16:00

（敬称略）

- 1 開 会（13:30）
公益財団法人 日本農林漁業振興会 常務理事 小栗 邦夫
- 2 挨 拶 農林水産省大臣官房政策課政策情報分析官 秋葉 一彦
熊本県農林水産部長 竹内 信義
- 3 選賞審査報告 農林水産祭中央審査委員会畜産分科会主査 栗原 光規
（農研機構・企画戦略本部研究統括部
スマート農業事業推進室長）
- 4 業績発表 令和4年度畜産部門天皇杯受賞
株式会社アドバンス（熊本県菊池市）代表取締役 永田 浩徳
- 休 憩（14:30～14:40）
- 5 ディスカッション（14:40）
（登壇者）
 - ・コーディネーター
栗原 光規（3に同じ）
 - ・業績発表者
永田 浩徳（4に同じ）
 - ・コメンテーター
農林水産祭中央審査委員会経営分科会専門委員 小泉 聖一
（日本大学生物資源科学部特任教授）

農研機構・生物系特定産業研究支援センター 大下 友子
事業推進部戦略的研究開発課研究リーダー

熊本県県北広域本部農林水産部農業普及・振興課主幹 廣瀬 大造
- （内容）
 - ・意見交換、質疑応答
 - ・総括
- 6 ご紹介・ご挨拶 令和4年度多角化経営部門天皇杯受賞
株式会社パストラル（熊本県山鹿市）代表取締役 市原 幸夫
- 7 閉 会（16:00）

第32回「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」出席者

R5.2.21（敬称略）

区 分	氏 名	所 属 ・ 職 名 等
業績発表者	永田 浩徳	令和4年農林水産祭畜産部門天皇杯受賞者 株式会社 アドバンス代表取締役
コーディネーター 及び選賞審査報告	栗原 光規	農林水産祭中央審査委員会畜産分科会主査 (農研機構・企画戦略本部研究統括部 スマート農業事業推進室長)
コメンテーター	小泉 聖一	農林水産祭中央審査委員会経営分科会専門委員 (日本大学生物資源科学部特任教授)
コメンテーター	大下 友子	農研機構・生物系特定産業技術研究支援センター 事業推進部戦略的研究開発課研究リーダー
コメンテーター	廣瀬 大造	熊本県県北広域本部農林水産部 農業普及・振興課主幹
挨 拶	秋葉 一彦	農林水産省大臣官房政策課政策情報分析官
	竹内 信義	熊本県農林水産部長
司会・進行	小栗 邦夫	(公財) 日本農林漁業振興会 常務理事

畜産部門

出品財 技術・ほ場（飼料生産）

株式会社 アドバンス

熊本県菊池市



1 地域の概要

菊池市は、熊本県の北部に位置し、農業産出額 383 億円のうち 77%を畜産が占め、畜種別では豚、肉用牛、乳用牛の順である。菊池地域の乳用牛飼養頭数は、生乳生産量西日本一である熊本県の約 4 割を占め、酪農の盛んな地域である。

2 受賞者の取組の経過と経営の現況

飼料用トウモロコシの生産・サイレージ（家畜用発酵飼料）調製及び TMR（完全混合飼料）製造・供給を目的とした大規模自給飼料活用型 TMR センターとして平成 19 年から酪農家への飼料供給を始めた。育成牧場（親牛になる前の雌牛を育てる牧場）を平成 28 年度に併設し、預託を受けた乳用種育成牛に黒毛和種牛の受精卵を移植することで和牛子牛の供給も始め、地域の酪農・和牛生産振興の中核となっている

3 受賞財の特色

（1）高品質で安価なトウモロコシサイレージを利用した TMR 生産と酪農家経営改善

地域の多くの農家からの多筆圃場でトウモロコシ二期作、良質サイレージ調製およびエコフィード（食品製造副産物等家畜用飼料）活用による高品質低価格 TMR 製造を地域内の作業連携により達成し、酪農家の軽労化と 1 頭当たり日乳量の県平均より 1 割増加を実現させた。

（2）地域連携による酪農および和牛産業の振興

乳用種育成牧場を併設し酪農家の労力軽減とともに、子牛の生産拠点から提供を受けた黒毛和種の受精卵を預託育成牛に移植することで和牛子牛供給の一翼を担い、和牛産業も包含した地域畜産業の持続性を高める役割を果たしている。

（3）女性の活躍

従業員 7 名のうち 2 名が女性であり、事務担当の 1 名がほ場作業の管理他、書類作成・提出等を一手に担うことにより、他の従業員は飼料生産や育成牧場管理に専念することができ、経営の効率化と生産性の向上に大きく貢献している。

4 普及性と今後の発展方向

耕作放棄地を含む作業受託面積の拡大、高品質低価格 TMR 供給および飼養管理技術指導による規模拡大を志す者や新規就農者への支援、高齢者の経営延長支援等は地域を支えるモデルであり、併設の育成牧場による酪農家の労力軽減、黒毛和種肥育素牛生産は菊池地域の畜産業の発展の基礎であり、全国の先導事例と期待できる。

【開会】公益財団法人日本農林漁業振興会 小栗 邦夫

敬称略（以下同じ）

只今から「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」を開催いたします。

私は、農林水産祭の事務局を担当しております日本農林漁業振興会、常務理事の小栗でございます。皆様にはご多忙中のところ、また、引き続き、コロナ禍が懸念される中、ご参加いただきありがとうございます。また、本日はオンラインでも、一方向ではありますが、視聴できるようにいたしました。慣れない設営ではありますが、よろしくお願いいたします。

本日のシンポジウムは、農林水産祭で表彰された優秀事例の成果を関係者の皆様に広くお伝えすることにより、今後の農林水産業の発展の一助になればと毎年開催しているものでございます。

農林水産祭は昭和37年に始まり、今年で61回を迎える伝統ある行事でございます。このうち、表彰事業は7部門に分かれておりまして、過去1年間に各種のコンテストで農林水産大臣賞を受賞されました 300近い出品財の中から、厳正な審査を踏まえ、天皇杯、内閣総理大臣賞、日本農林漁業振興会会長賞、いわゆる三賞が授与されます。特に、天皇杯につきましては、わが国で天皇杯なるものが30、下賜されておりまして、ほとんどがスポーツ関係。正月のサッカーや国体の天皇杯が有名ですが、そのうち、一つの部門で七つ天皇杯を下賜していただいているということで、ご皇室の農林水産業に対する熱い思いを誠にありがたいことと思っているところでございます。

今年度も、昨年11月、勤労感謝の日、新嘗祭の日でございますが、東京の明治神宮会館におきまして表彰事業を行ないました。本日はそのうち畜産部門で天皇杯を受賞されました熊本県の株式会社アドバンス代表取締役の永田浩徳様にお越しいただきました。改めてお話をいただき、また学識経験者の方々と意見交換をお願いするところでございます。受賞後は一層お忙しくなったことと思いますが、快くお引き受けいただきました。改めましてお祝いと御礼を申し上げます。

それでは、本日は、共催いただいております農林水産省からは大臣官房政策課の秋葉政策情報分析官にご参加いただいております。農林水産省を代表してご挨拶をいただきます。

皆さん、こんにちは。農林水産省大臣官房政策課政策情報分析官の秋葉と申します。令和4年度第61回農林水産祭「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」の開催に当たり一言ご挨拶を申し上げます。

まず、本日、非常にお忙しい中、WEBの参加者の方々も含めまして、たくさんの皆様ご参加いただきまして誠にありがとうございます。

農林水産祭でございますが、先ほど日本農林漁業振興会の小栗常務からご説明がありましたとおり、優秀農林水産業者の表彰、その業績の普及を目的の一つとして実施しております。このシンポジウムは、その一環として開催しているものでございます。農林水産祭は昭和37年から開催されており、先ほどご紹介があったとおり、今、全部で30の天皇杯が天皇皇后両陛下、皇室から下賜されております。そのうちの23がスポーツ分野でございまして、そのほかのあとの7つが農林水産業でございます。したがって、いわゆる単なる産業表彰ということではなくて、国の基、地域をどうやって、日本という国の成り立ちを支えていくといったもので、農林水産業はそれだけ重要な位置付けなんだということ、これは我が国としてもそういう認識でいるということのあらわれだを感じているところでございます。非常に重要な名誉ある表彰事業と認識しているところでございます。

今回、業績発表をしていただきます熊本県の株式会社アドバンス様におかれましては、熊本県は全国でも、我が省、畜産局で言ったら知らない人はいないといったような会社でございますが、大規模自給飼料活用型のTMRセンターとして、飼料トウモロコシの生産、サイレージの調製、発酵TMRの製造、供給を行なっているとともに、さまざまな地域の技術水準の向上に向けた取り組みを行なっているということでございます。また、乳牛の預託育成牧場を併設しておりますが、これは熊本県としても、九州の畜産でも非常に重要な位置付けになっておりますが、黒毛和種の受精卵預託牛に移植して、肥育素牛の供給を行なうといったところで、地域の畜産をトータルで引っ張っているという形態でございます。本日はそのすばらしい業績についてお話を伺うわけですが、特に報告書などの書類だけではわからない部分、その業績に対するさまざまな角度から意見交換を行なうことができる貴重な機会と認識しております。

それからもう一つ、ご紹介させていただきます。このたびの天皇杯、熊本県から多角化経営部門、山鹿市の株式会社パストラル様が天皇杯を受賞されております。非常に距離の

近いところでございます。後ほどご紹介させていただきますが、本日は代表の市原幸夫様にも会場にお越しいただいているところでございます。

また、内閣総理大臣賞として女性の活躍部門畜産で大津町のセブンフーズ、前田佳良子さんが受賞されております。さらに、日本農林漁業振興会会長賞として林産部門と女性の活躍部門として南小国町の穴井里奈様が受賞されているおりました、熊本県の中でも比較の一つの地域のところから何と4名も受賞されていることは、これまで三賞受賞の資料でもなかなか例のないこととされているところでございます。

年明けに、アドバンス様、パストラル様、私も訪問させていただきました。それぞれの皆様に共通しているのは、基幹産業である農林業、パストラル様は林業振興も行なっているわけですが、これが地域に付加価値をもたらす重要な産業として卓越したアイデアと、地域に密着した努力によって、20年後、30年後に、この地域で暮らしている人の姿を見通した取り組みをされていることです。今、働いている若い人が希望を持って仕事ができなければ、農林水産業地域が持続することは成り立たないという意志を持って、普段から向き合っておられることに非常に感銘を受けたわけでございます。これはいわゆる農林業振興の枠を越えて、地域創世のトップランナーとしてご活躍されていることにほかならないと考えております。

本日、お集まりの皆様も、このような方が非常に身近にいらっしゃることをぜひ誇りに思ってください、当地、熊本の明るい未来に向かって、皆さんの立場で一緒に受賞者の方と考えると、明るい未来を目指して何ができるかということを思い馳せていただければ幸いですと考えております。

最後になりますが、本日のシンポジウムが関係者の皆様の今後のご活動の一助となることをご期待申し上げ、簡単ではございますが、私の挨拶とさせていただきます。本日はどうもおめでとうございます。(拍手)

○司会 ありがとうございました。

続きまして、シンポジウムの開催に当たり、地元熊本県の関係者の方々に大変お世話になっております。この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。本日は農林水産部の竹内部長に参加いただいております。県を代表してご挨拶をよろしくお願いいたします。

皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました熊本県農林水産部長の竹内でございます。
令和4年度農林水産祭「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」の開催に当たり一言ご挨拶申し上げます。

本日は、会場、オンラインともに、多くの方のご参加を得て、このシンポジウムが盛大に開催されますことに心からお祝い申し上げます。

本日のシンポジウムは、今年度、農林水産祭、畜産部門で天皇杯を受賞された本県の株式会社アドバンス様の業績をご紹介いただき、広く普及させていくことを大きな目的として開催されると伺っております。今回、ここ熊本の地でこのような機会を設けていただきまして、農林水産省、それから日本農林漁業振興会など、関係者の皆様に感謝申し上げます。また、先ほど来、ご紹介がありますように、本日、発表、あるいはご紹介されます株式会社アドバンスの永田様、それから株式会社パストラルの市原様におかれましては、先般、知事のほうに天皇杯受賞の報告もしていただきまして、知事も大変喜んでおります。

本日の先ほど来、ご紹介いただきますように、本県、農林水産業、特に農業県としてこれだけたくさんの天皇杯をちょうだいできるというところに力強さがあると感じているわけでございます。一方で、酪農、それから肉用牛生産に当たりましては、高齢化の進展、経営規模拡大に伴います労働力不足の解消、それから輸入飼料へ過度に依存しない経営の転換が喫緊の課題となっているところでございます。このため、本県におきましては、食料安全保証の一翼を担う畜産業の持続的な発展を目指して、関係機関の皆様との強固な連携のもとで、経営を支える外部支援組織の育成、強化や、次世代人材の確保、国産飼料基盤の強化など、総合的な取り組みを展開しているところです。

本県は西日本一の酪農県でございます。アドバンス様が活躍されている菊池地域は本県の中でも特に畜産が盛んな地域となっております。平成の早い時期から自給飼料生産を請け負うコントラクターや肉用牛ヘルパーなどの外部支援組織が設立されるなど、長期的な視点に立ち、先進的な取り組みが行なわれております。特にアドバンス様はこれらの取り組みをさらに発展させ、本格的な自給飼料型TMRを製造、供給する会社として、地域の酪農家の皆さんが主体となって設立されたところです。この後、詳細な発表等があるかと思いますが、TMRの飼料用トウモロコシについて、構成員である地域の酪農家の点在する農地を一元管理、集積されて生産されておきまして、耕作放棄地の解消にも貢献いただ

いているところでございます。また、肉用種の育成牛の預託牧場を整備されており酪農家の方が飼養管理に集中できる体制作りに取り組まれますとともに、キャトルブリーディングサービスと連携されて、和牛子牛の供給にも大きな役割を果たされております。その活躍ぶりは本県が目指しております地域にある資源を最大限に活かした畜産業の持続的発展につながる取り組みを体現したものでございまして、他に類を見ない全国に誇るべき組織となっていると思っております。本日のシンポジウムを契機といたしまして、アドバンス様の取り組み、またパストラル様のご紹介もあるかと思いますが、こういった本県の力強さ、それから日本の食料安全保障の確保につながる取り組みを皆様に共有していただくことで、今後さらなる本県農業、引いては日本の食料安全保障に貢献していけるのではないかと考えております。

結びに、本日ご参加の皆様方の今後ますますのご活躍とご健勝を祈念いたしまして、私からのご挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。(拍手)

○司会 ありがとうございます。それでは、これから議事に入ります。最初は選賞審査報告です。中央審査委員会、畜産分科会主査であります農研機構・企画戦略本部の栗原室長をお願いいたします。

【選賞審査報告】農林水産祭中央審査委員会畜産分科会主査 栗原 光規
(国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研機構 企画戦略本部
研究統括部スマート農業事業推進室長)

皆様、こんにちは。ご紹介いただきました農研機構の栗原と申します。私は本年度の農林水産祭中央審査委員会の畜産分科会の主査を担当しておりましたので、最初に畜産部門での選賞の経緯等についてご報告させていただきます。

まずは、アドバンス様、このたびは天皇杯の受賞、誠にありがとうございます。私ども審査委員も、審査しながら、現在のこの非常に厳しい畜産経営の環境の中で各種の課題を突破する全国の模範となる先導的な事例であると、ワクワクしながら審査をしたことを思い出しながらお伝えしたいと思います。

それでは、具体的に経緯についてご紹介させていただきます。

このスライドは農林水産祭の趣旨等が書かれているものですが、この部分につきまして、先ほど振興会の小栗常務様、あるいは本省の秋葉情報官様からご説明がありましたので、簡単にご説明させていただきますと、趣旨はそこに記載のとおりです。部門につきま

しても、先ほどご紹介がありました
 ましたが、そこにあります7部門
 と女性の活躍で、この部分で熊
 本県におきましては、今年度、
 4件が受賞されたということで、
 誠に喜ばしい結果になっており
 ます。受賞の区分としましては、
 天皇杯に加えて、内閣総理大臣

【農林水産祭の趣旨】

国民の農林水産業と食に対する認識を深めるとともに、農林水産業者の技術改善及び経営発展の意欲を高めるため、農林水産省と公益財団法人日本農林漁業振興会の共催により昭和37年から実施。令和4年度は61回目。

【農林水産祭選賞部門】

●農産・畜産部門 ●園芸部門 ●畜産部門 ●水産部門
 ●林産部門 ●多角化経営部門 ●むらづくり部門
 ●女性の活躍

【授賞区分】


天皇杯


内閣総理大臣賞


日本農林漁業振興会
会長賞

賞と日本農林漁業振興会会長賞の3賞があつて、アドバンス様が最高賞の天皇杯に輝きま
 した。

次に、このスライドは選賞の経
 過ですが、選賞の対象は令和3年
 の7月から4年の6月までの1年
 間に農林水産祭参加表彰行事にお
 きまして、農林水産大臣賞を受賞
 した300以上というご紹介があり
 ましたが、確認してみたところ、
 390を超える主な成果が対象とな

【第61回農林水産祭選賞経過】

- ・選賞対象: 令和3年7月～令和4年6月の農林水産祭参加表彰行事において農林水産大臣賞を受賞した390超の出品財うち、畜産部門の審査対象数76点(内訳産物58、技術・ほ場3、経営15)
- ・選賞経過
 令和4年7月13日 第1回畜産分科会にて書類選考
 現地調査3候補の選定
 令和4年8月9～19日 現地審査(1ヶ所はリモート開催)
 令和4年9月12日 第2回畜産分科会にて三賞選考
- ・選考委員(畜産分科会委員・専門委員)
 <委員>
 栗原光雄(農研機構)、柏崎直巳(麻布大学)、矢野小夜子(元京都府畜産センター)
 <専門委員>
 小泉聖一(日本大学)、仙北谷康(帯広畜産大)、野中景子(農研機構)
 勝田 賢(農研機構)、白田一敏(ビー・キューサー)、川田智弘(栃木県庁)
 野中和久(農研機構)、井口明浩(元千葉県畜産総合センター)

※下線は本日の発表会参加者

りました。このうち、畜産部門の審査対象は76点ですので、ほかの部門と比較しても非常
 に厳しい審査となっております。

選賞の経過としましては、昨年の7月に第1回分科会におきまして書類審査を行いました
 て、現地調査の候補地、3カ所を絞り込みました。その後、8月9日から19日の間に現地
 調査を行ないました。このうち、1カ所につきましては、冒頭のご挨拶にありましたが、
 コロナの状況がまだ完全に落ち着いておりませんでしたので、リモートでお話を伺ったと
 いう状況であります。その後、現地調査を踏まえまして、9月12日に第2回分科会で先ほ
 どお話しした3賞を選考したということでもあります。その際に審査を担当した選考委員は
 ここに示しました委員3名と専門委員が8名という形になっておりまして、下線を引いた
 私と、日本大学の小泉先生が本日コメンテーターとして参加していただいております。

次のスライドが選ばれた3賞ですが、天皇杯につきましては、最上段にあります、熊
 本県菊池市のアドバンス様で、代表の永田浩徳様には本日ご講演をいただきます。受賞の

理由につきましては後のスライドで詳しく紹介します。中段、内閣総理大臣賞ですが、これは岐阜県高山市の養豚経営で、平成30年に29年ぶりとなる豚熱が岐阜県で確認されて、現在も全国に拡大しているのですが、そういう中で衛生管理の徹底と完全無薬化に

【今年度の三賞決定】

- ・ **天皇杯 技術・ほ場(飼料生産)** 熊本県菊池市
ながた ひろのり
株式会社アドバンス(代表 永田 浩徳)
「地域畜産業の基盤となる大規模自給飼料生産・活用型TMRセンター」

- ・ **内閣総理大臣賞 経営(養豚)** 岐阜県高山市
よしの つよし・よしのさとこ
吉野 毅・吉野 聡子
「飼養衛生管理徹底と完全無薬化による
安全・安心で健康な豚肉の生産」

- ・ **日本農林漁業振興会会長賞 経営(採卵鶏)** 岡山県笠岡市
たかた あきひこ
有限会社たかた採卵(代表 高田 安紀彦)
「小規模採卵養鶏経営における女性の活躍を
いかした6次産業化の実現」


よる安全・安心で健康な豚肉の生産を行なうという取組で優秀な成績を収めております。吉野様ご夫婦が受賞しております。息子さんお2人も就農しておりまして、期待できる経営でありました。3番目に日本農林漁業振興会会長賞につきましては、岡山県の笠岡市の採卵養鶏で、採卵養鶏としましては4万羽という小規模ながら、女性の活躍を活かして6次産業化によって収益性の高い経営を実現している高田採卵様が受賞しました。また、この経営では従業員の7割が女性で、生き生きと活躍している状況は特筆するものであったということで受賞されております。これが3賞の概要でございます。

選考の基準としましては、ここにありますように、大きく、経営的な視点と技術的な視点、総合的な視点の三つの異なる視点で経営全体を評価するとともに、地域社会において果たしている役割という点につきましても、選考の際には十分に考慮して選考させていただいております。

【審査の基準】

経営全体を審査するとともに、その経営が地域社会において果たす役割についても十分考慮すること。

【経営的視点】

- ① 経営の合理性、安全性
- ② 生産基盤の整備、資本設備の投資、利用効率
- ③ 管理(労務管理等を含む)、計画性、改善意欲

【技術的視点】

- ① 技術の優秀性、先進性、波及性

【総合的視点】

- ① 経営、生産性、所得、コンプライアンス
- ② 女性の活躍

このスライドはアドバンス様の受賞理由を紹介しているものです。まずはアドバンス様の取組と経過と概要ですが、この部分につきましては、永田様から詳細なご紹介があると思いますので、簡単に説明しますが、20年前に酪農家20戸を構成員としまして、飼料用のトウモロコシ生産からサイレージ調製、発酵TMR製造・供給を目的としたTMRセンターとして、受託面積 130haで立ち上げられております。その後に、酪農家に加えて肉牛

農家への飼料の供給、さらにはバンカーサイロを増設、6年前には育成牧場の併設によって、酪農家の育成牛を預かって軽労化、省力化に貢献することに加えて、地域のキャトルブリーディングセンターと連携して、黒毛和種牛の受精卵を移植して和牛子牛を地域の和牛生産者に供給を開始して、

現在、菊池地域の酪農、和牛生産振興の中核組織として活躍していることで高く評価されています。

このような幅広い取組をしていることから、このアドバンス様の取組については推薦の段階では活用型というのがタイトルに抜けておりました。大規模自給飼料生産TMRセンター、そういうような形だったんですが、私ども審査をしまして、自給飼料の生産、利用にとどまらない、地域でそれを核として活用して幅広い取組をしているということで、本日のタイトル、あるいは選賞の最後のタイトルには「活用型」という文言を入れさせていただいております。

受賞の特色について大きく三つに整理してご報告させていただきますと、第1が一番上段に書いてあるタイトルですが、高品質で安価なトウモロコシサイレージを利用したTMR生産を通じて、酪農家の経営改善につなげている点であります。飼料生産では約600筆、

延べ328haに及ぶ農地を地域の多くの農家さんから借用して、この多筆ほ場を、ICT技術を活用して効率的に管理をしております。また、トウモロコシの二期作は、九州熊本以南等ではかなり進んでいますが、本州、当然、北海道等では二期作などはできない。そういう意味では土地を最大限活用して、飼料用作物の単位面積当たりの飼料生産を最大として良質サイレージを調製した上で、豆腐かすや醤油かすなどのエコフィードを有効活用し

【令和4年度畜産部門天皇杯((株)アドバンス)受賞理由】

・受賞者の取組の経過と経営の現況

- 平成19年に酪農家20戸を構成員として、飼料用トウモロコシの生産・サイレージ調製及び発酵TMR製造・供給を目的とした大規模自給飼料生産・活用型TMRセンターとして、酪農家への飼料供給を受託面積延べ130haで開始
- 平成22年度より、肉用牛農家にも供給開始
- 平成27年度にバンカーサイロを8基から11基に増設
- 平成28年度に育成牧場を併設し、預託を受けた乳用種育成牛に黒毛和種牛の受精卵を移植することで和牛子牛の供給を開始(キャトルブリーディングステーション(CBS)との連携)
- 現在、熊本県菊池地域の酪農・和牛生産振興の中核組織として活躍

6

・受賞者の特色①

【高品質で安価なトウモロコシサイレージを利用したTMR生産と酪農家経営改善】

- 地域の多くの農家からの多筆圃場(約600筆、延べ328ha)でのトウモロコシ二期作栽培をICT技術により効率的に管理し、良質サイレージ調製およびエコフィード活用による高品質低価格TMR製造(Non-GMO飼料も製造)を達成
- 地域内作業連携(収穫をコントラクターに委託)により、多忙な収穫時期もTMR製造に専念できる体制を構築
- 酪農家を年2回巡回し、ニーズに合った発酵TMRを調製・供給し、また飼養管理指導による技術向上により、1頭当たり日乳量の県平均より1割増加を実現

酪農家経営改善に貢献

7

て、高品質、かつ低価格のTMRを、年間を通じて安定的に製造している点、この点も高く評価されています。さらには、Non-GMO飼料も製造して、生協と連携して、ここに写真を添付しましたが、特徴のある牛乳生産にもつなげている、そういう取組もしていることです。また、飼料生産の点では、トウモロコシの収穫については、地域のコントラクターとの連携も積極的に行なっておりまして、収穫で多忙な時期も低価格なTMRの製造を安定的に行なえる体制を構築しております。

また、酪農経営の改善の点では、地域の関係機関と連携して、年2回酪農家を訪問して、飼料に対するニーズを聞き取って、ニーズに合ったTMRを製造して供給することにつながっています。同時に各酪農家の飼養管理についても確認、指導を行なっていただいて、酪農家の技術向上につながっています。その結果として、乳量が県の平均の1割増という結果にもつなげていることで、飼料生産からミルクの生産向上、あるいは特徴のあるミルクの生産につながっていることで高く評価されております。

次に2点目の特徴としましては、

地域連携によって、酪農だけではなく、和牛産業の振興にも貢献している点、この点が評価されております。先に肉牛農家にもTMRの供給を行なっているという話をしましたが、加えて、育成牧場を併設して酪農家の労力軽減に役立っているとともに、その育成牛に黒毛和種牛の受精卵を移植して、年間180頭にも及ぶ黒毛和種子牛を生産して、地域のキャトルブリーディングセンターに供給することで、菊池地域の黒毛和種肥育素牛の生産の一翼を力強く担っている点であります。

三つ目の特徴として女性の活躍ですが、アドバンス様は7名のう

・受賞者の特色②

【地域連携による酪農および和牛産業の振興】

- 乳用種育成牧場(300頭規模)を併設し、酪農家の育成牛管理に必要な労力軽減
- 子牛の生産拠点(CBS:年間500頭供給が目標)から提供を受けた黒毛和種牛受精卵を預託育成牛に移植することで、菊池地域での黒毛和種肥育素牛供給(約180頭)の一翼を担う

↓

酪農に加え、和牛産業も含めた、地域畜産業の持続性向上に貢献



・受賞者の特色③

【女性の活躍】

- 従業員7名のうち2名が女性であり、事務担当者…99戸からの600筆の圃場作業の管理他、書類作成・提出等を一手に担うことにより、他職員が飼料生産や育成牧場管理に集中

生産管理担当者…フォークリフトの免許を取得し、TMR製造を担当し、従業員間の負担分散

↓

経営の効率化と生産性の向上に大きく貢献



ち2名、3割ぐらいは女性の方が事務と飼料生産の担当をしていただいているということで、事務担当の方は非常にたくさんのは場の管理に係わる事務を一手に引き受けることで経営の効率化に貢献しています。また、女性の生産管理の担当の方は、フォークリフトの資格を積極的に取得して、ほかの職員の方々との負担の分担の一翼を担っていることで、積極的に女性も経営に参画していることで高く評価されております。

最後に今回の取組と普及性と展開方向ですが、これにつきましても、アドバンス様の地域での役割としては、一つ目に耕作放棄地を含めて地域の農地を維持・活用すること、二つ目には、規模拡大を志す者や新規酪農家の支援を行なっていること、三つ目には高齢の酪農家の経営延長への支援が期待で

・普及性と今後の展開方向

- 耕作放棄地を含む作業受託面積の拡大(H19:130 → R3:193ha)、高品質低価格TMR供給および飼養管理技術指導による規模拡大を志す者や新規就農者への支援、高齢者の経営延長支援等の取組は地域を支えるモデル
- 上記に加え、併設の育成牧場による酪農家の労力軽減、黒毛和種肥育素牛生産は菊池地域の畜産業の発展の基礎であり、全国の先導事例



我が国の自給飼料基盤と地域畜産業の振興を図る外部支援組織のモデルとして更なる発展が期待できる

10

きることとあります。これらは今後我が国の地域を支えるモデルとなる取組と考えられると思っております。さらには、TMRセンターとして設立されたアドバンス様には育成牧場が併設されて、酪農家の労力軽減に加えて、黒毛和種肥育素牛生産にも積極的に取り組んでおり、菊池地域の畜産業全体の発展の基礎となっています。これは全国の先導事例と考えられまして、我が国の自給飼料基盤と地域畜産業の振興を図る上で外部支援組織のモデルとしてさらなる発展が期待されるものであるということで、今回の受賞に至ったところであります。

以上が私からのご報告となります。ありがとうございました。

○司会 栗原室長、ありがとうございました。続きまして、業績発表でございます。天皇杯受賞、熊本県菊池市、株式会社アドバンス、代表取締役、永田浩徳様、お願いいたします。

【業績発表】令和4年度（第61回）農林水産祭畜産部門 天皇杯受賞

株式会社 アドバンス

代表取締役 永田 浩徳

皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました株式会社アドバンスの代表をしております永田と言います。何分不慣れですので、今、説明がありましたように、同じようなことを

繰り返すかもしれませんが、ご説明をしていきたいと思いますので、よろしくお願いいたしますと思います。

最初に、1月に私たちアドバンスが受賞いたしましたことでJ A菊池と菊池市さんと、それと、らくのうマザーズさんで祝賀会を開いていただきました。そのときの動画をJ Aの職員の西本君がつくってくださいましたので、それを流してから説明に入りたいと思いますので、よろしくお願いいたします。1分ぐらい、ちょっと音声が途切れているということです、よろしくお願いいたしますと思います。

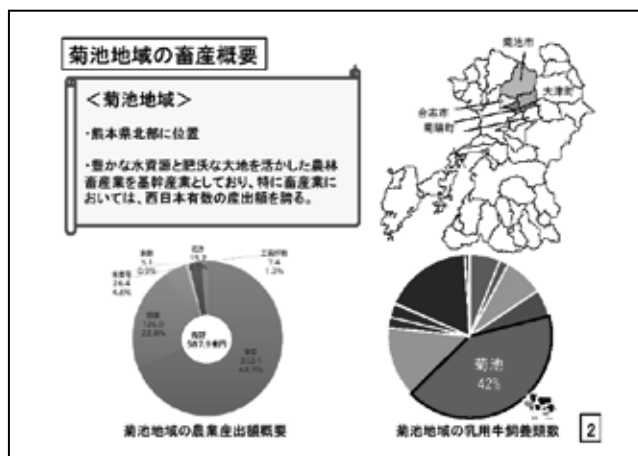
〔動画上映〕

設立からの足どりといいますか、ある限りの材料で作っていただきましたが、集合写真などは十五、六年前ですので、私もまだ若うございまして、どれだろうかなと探してみるところでありましたが、説明に入りたいと思います。

私たち株式会社アドバンスは熊本県の北部に位置し、菊池市に会社がございます。ご案内のとおり、平成19年に設立いたしましたして、20年に稼働という形になりますが、令和3年度は売上が7億 2,272万円というところで、令和4年度、1月締めでありまして、まだ数字としてはちゃんと出ておりませんが、今年は8億以上、もちろん飼料高騰のおかげで、利益率はずっと下がっているところであり、令和3年の飼料の部門では6億 8,000万、育成で 3,700万の収入があったところです。

菊池市は、右手にあります、平成の大合併で、菊池市、旭志、泗水、七城と、非常に畜産の盛んな地域が一緒になったところであり、下のほうに位置しますところがアドバンスの敷地の写真でございます。

アドバンスの組織図といたしまして、現在、構成員が21名、役員が4名のうち代表が1人、職員は現在8名、工場長1人と7名の従業員で、女性従業員が2名、うち

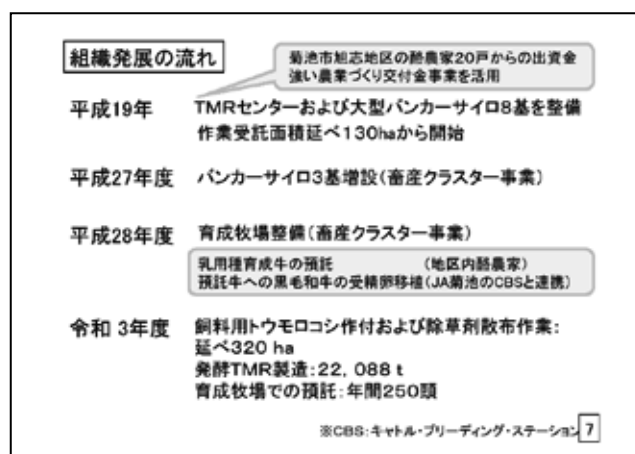
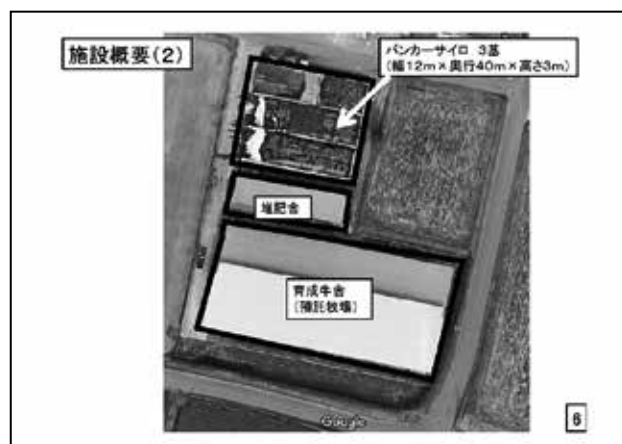


1人が事務という形になっておりますが、事務の方も人手が足りない、忙しいときには、長靴をはいて、外に出てきて、牛（育成牛舎）の方へ行ったりとか、サイレージの調製のときに手伝ってくれます。臨時雇用といたしまして、畑の作業とかをしていただく人が1名職員がおります。

施設位置ですが、これは設立時に建てた幅12m、奥行き40m、高さ3mのバンカーサイロが8基、それと、乾草保管庫、上からTMRの発酵・貯蔵スペース、TMRの梱包した貯蔵スペースに一時保管という形であります。

これが平成26年に増設しましたバンカーサイロです。同じ大きさ、12m、40m、3mのバンカーサイロを3基増設。翌年に育成舎をつくりまして、堆肥舎も一緒に新設をしたところです。

平成19年に大型バンカーサイロ8基を整備しながら、延べ大体130haほどから始めたのですが、年々畑の面積が増えてまいりまして、バンカーサイロが足りないということで、平成27年にバンカーサイロを3基増設。28年にはクラスター事業で育成舎等をつくった。これもJA菊池のキャトルブリーディングサービスと



連携をいたしまして和牛の生産にも協力をしているところであります。令和3年度にはトウモロコシ作付けが延べ320ha、発酵TMRの製造が2万2,088tの製造ができた。育成のほうは常時250頭ほどの育成を預かっておりまして、毎月、月頭に入牧する牛と、会員の牧場に帰る牛、退牧という形で、月1回、入牧、退牧というような形で常時250頭前後の牛を管理しているところです。

アドバンスの年間の流れといたしましては、畑の準備、堆肥を振った

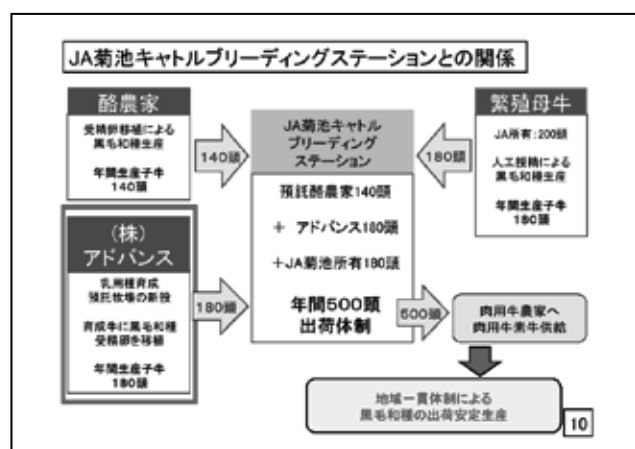


月の中旬ぐらいまでには播種作業がほぼ終わり、5月に入って除草作業が始まって、7月15日ぐらいから8月15日までに1回目のトウモロコシの収穫を旭志中央支所のコントラクター利用組合に委託して行なっている。会社のバンカーサイロに次々とダンプで運んで、大型シャベルで鎮圧をしている。それを1カ月以上寝せて、サイレージになったものをTMRにするのですが、年間通じて一番のトウモロコシのサイレージを10kg、二期作目、秋に取れたトウモロコシを10kg、それに指定の配合飼料に輸入乾草、エコフィード等をブレンドして圧縮、梱包作業を行い、貯蔵。ちょうど1カ月ぐらいの発酵飼料を各牧場で搾乳牛に与えるという流れです。育成牧場のほうですが、現在は生後7カ月齢の牛を入牧いたしまして、21カ月齢ぐらいになって、各農家に和牛の移植をした牛が帰っていく。これが

ベストですが、7カ月齢の牛が入牧するのは変わりませんが、なかなか計算どおりに21カ月に戻せるというわけでもありませんし、1回で受精卵が止まらなかったり、2回しても止まらなかったりする例も多々あります。そういう2回しても受胎しなかった牛等は交雑種を入れたり、ホルスの雌を入れたり、農家と話しながらその辺は進めております。牧場に帰った牛が分娩をいたしまして、1日、2日でキャトルブリーディングステーションから取りに来ていただく。市場の3カ月の平均の半額という形で契約をしております。上がるときには徐々にしか上がりませんが、下がるときにも徐々にしか下がらないという形で取引をしております。もともとの発想ですが、これはキャトルブリーディングステーションにもホルスの育成牛が多分二百二、三十頭いると思いますが、受精卵を移植すると、生まれた子供をキャトルに半額でもやる。そうすることによって、預けている期間の費用を見る。農家の負担がそこで減るんじゃないかと。お産もホルスの初産の牛がお産をするのに和牛の子牛が小さいので、お産も無理をしないのではないかという発想のもとでなっているという話は聞いております。そういう形になればベストですが、そこがなかなかうまくいったり、いかなかったり、死産だったり、ホルスだったりとか、いろいろ課題は今後まだ残っていると思います。

それと、TMRの制度ですが、設立時に20名の会員で始めたわけですが、そのうち、7軒の農家がもともとNON-GMOの生産農家でありまして、規模的には規模拡大をしている人が結構多かったので、設立当時はほぼ半分半分ぐらいの製造量であったので、NON-Gのラインと普通の餌のラインという形で作って、現在では外部さんとか、いろいろおるので、一般の製造のほう为上回ってはおりますが、そういう流れで2ライン作って行なっております。

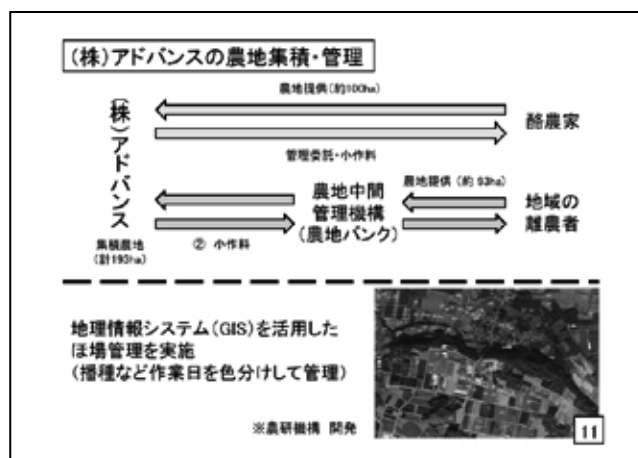
ブリーディングステーションとの関係ですが、JA菊池の施設の中でブリーディングステーションがありまして、アドバンスから目標として180頭の和牛の生産をしようと。それと、JAの酪農部会の会員さんからの子牛の生産を140頭、それと、JA



A所有、キャトルブリーディングにも黒毛和種がいますので、そこから180頭の子牛を生産。年間に500頭の子牛を生産いたしまして、各肉用牛の農家さんに300kgの元牛までキ

ヤトルブリーディングが育てまして供給をしている。昨年、5年目だったのではないかと
思いますが、目標に達成したという報告がございました。少しはアドバンスとしても協力
ができたのではないかなというところ です。

農地の集積ですが、もともと会員
さんであった20名の農家さんが作付
けをしていた畑をアドバンスにその
まま貸したところで、最初 130haぐ
らいございました。それと、旭志の
酪農家さんが離農されたところの畑
を、農家さんからそのまま作ってく
れという形で、徐々に面積が増えて



まいりまして、最初は土地集積型で農協で管理をしてもらっておりましたが、現在は期間
が切れた分だけ農地バンクと契約してやっているところで、現在、193haぐらいの面積を
管理しているところです。地理情報システムですが、GISと言って、ほ場に作付けをし
た、今日はどこどこを誰々が作付けをしたという形で管理できるし、コントラクターに
も同じ地図を渡しておいて、ここを刈ってくれ、ここを刈ってくれという形にしておい
まして、その日のうちの刈り取り面積が出資会社のパイオニアさんからそういう知恵を借り
まして、コントラクターが2台ありまして、アドバンスでもほ場の狭い畑用にトラクター
に三条刈りをつけて刈っておまして、1日3台で何haした、このバンカーサイロに今何
haの分が入っていますよという情報を入れながら、サイロ締め調整だったり、半分ぐら
い終わったときに、面積があとこのくらいなので、バンカーサイロが何本要るのねとか、
そういう話をしながら、非常に便利に活用をしております。

これは除草作業ですが、多分、2
回目の作業になると思います。2回
目は、去年はなかったのですが、ヨ
トウムシとか、そういうのがあ
るので、除草剤に殺虫剤を一
緒に入れて散布しているところ
です。

トウモロコシの収穫作業ですが、

これはジョンディアの8条刈りで、ダンプが後ろについて、それをアドバンスのバンカー



サイロに運んで、大型シャベルで鎮圧というところなんです。

サイレージができて、それを利用してのTMR作業です。これは前のほうにかき取る装置がついておりまして、断面を切っていくようにサイレージを取っていく。空気が入

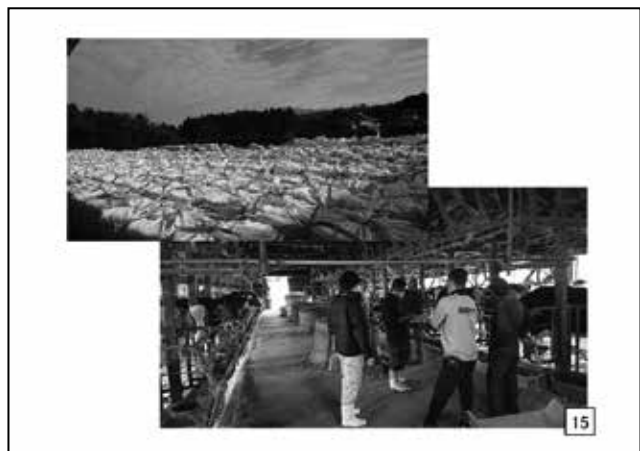
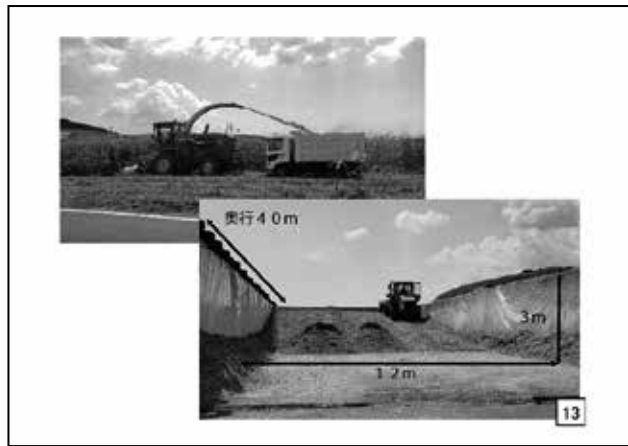
らず、変敗がしにくいというような形で、27m³の機械で混ぜているところです。

上の写真がTMRを圧縮、バキュームした後に保管場所で一時保管というところです。青いバンドがついているのがNON-G用の餌です。

一般用の餌は青いバンドがついていない、一目でわかるような区別をちゃんとしているところです。下のほうが、大体5月と10月に農家巡回というところで、メニューを組んでもらっている経済連の織田さんとか、会社の職員と私等と一緒に農家を1軒ずつ回って、餌の食いだとか、繁

殖の問題等がないだろうかとか、乳成分だとか、検定記録を見ながら話を聞いて、若い後継者などがまだまだ飼い方が定まっていないところなどには、同じような規模、管理のところを、あそこはこういうふうになっているよ、同じようにすると同じような成績が出やすいのではないかとか、そういう情報交換をオープンにして、なるべく出る人と出ない人の間を小さくしていくには大事な巡回かなと思っております。

これが育成牧場で、左側が入牧したすぐの牛で、ずうっと奥に行って、奥から右側になって、こっちに来たときに各農家に戻していくという流れで、36mの75mだったですか、

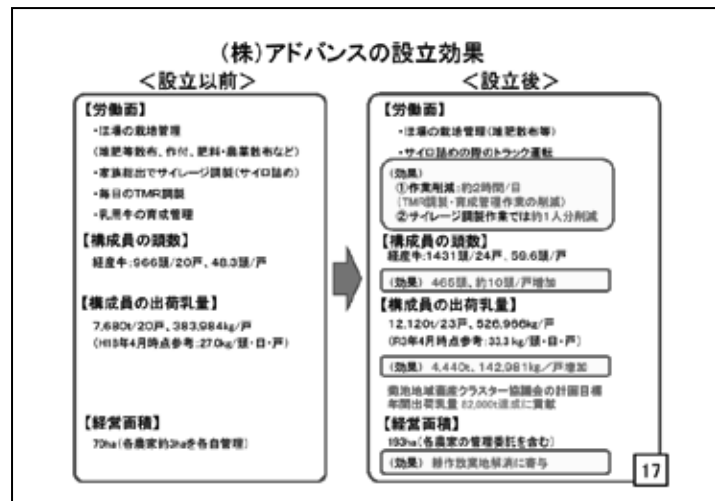


1 棟の育成舎になります。

設立前と設立後とありますが、ほ場の管理が個人でやって、家族総出のサイロ詰め、調製、毎日のTMRの製造、乳用牛の育成管理だったりするところを、ほ場管理はアドバンスがみんなで行う。サイロ詰めに関



しましては、各農家が家族総出でやっていたところですが、奥さん方等も暑い中サイロ詰めをして、毎日の朝晩の搾乳、子牛の管理等がありますが、アドバンスの会員さんのところは、親方さんがサイロ詰めに出て、家に残っている方が、夏場なので、



牛の治療をしたり、管理をしたりというところで、ここ十五、六年は、アドバンスの会員さんの奥さんたちはサイロ詰めを知らないという形で、見えないところのプラスの部分ではないかなと思います。構成員の乳用牛の頭数ですが、経産牛が大体 966頭いましたが、現在、規模拡大、大分増えまして、1,431頭の経産牛の管理。平均が59頭、60頭近くの1戸平均になっています。ここも十二、三頭は1戸平均が増えているところです。おのずから、出荷乳量も、20軒で 7,680 t、1戸当たり38万 3,000kgだったんですが、設立後は1万2,120 t、23戸平均ですが、1戸平均が52万 6,966kgで、規模も大きくなりましたし、頭数も増えた。しかしながら、毎日の作業は以前より逆に楽になったのではないかなと思います。1頭当たりの成績も、平均で言っても5kg以上は伸びているところで、その辺も発酵飼料は吸収率等がいいと思いますので、乳量も当初よりも増えているところです。経営面積ですが、70ha、各農家が持って、平均3haぐらいだったのですが、現在は193haで、管理をみんなで行っているところです。作ってくれと言われるので、アドバンスとしては畑を作って、トウモロコシを作るのが一番の課題で、耕作放棄地等が発生せずに済んでいる状況ではないかなと思っています。

今後の展望ですが、四つほど挙げてありますが、3番目の新規就農者への飼料供給では、

今年度の7月より、新しく旭志の中で酪農を始める方がおられまして、若い、30歳ぐらいの夫婦ですが、やりたいというところで、餌を供給する計画になっております。もともとその農家さんは繁殖農家、肥育農家さんだったのですが、若い世代に代わって、酪農をやりたいというところで、成績が出ている、繁殖等問題がない、最初に始めるときには餌をやっていくと、心配も少しずつなくなって、スムーズに酪農経営者になっていくのではないかなと。その辺に少しは貢献できるのではないかなと思っております。

話せばまだいっぱいありますが、こういう形で私の発表、説明を終わらせていただきたいと思います。ありがとうございました。(拍手)

○司会 永田様、ありがとうございました。ここまで2件の発表にご質問などあろうかと思いますが、パネルディスカッションの中で、会場から参加いただく時間もありますので、その中でお願いをいたします。ここで10分間ほど休憩に入ります。14時45分に再開いたします。それまでにお席にお戻りくださいませ。

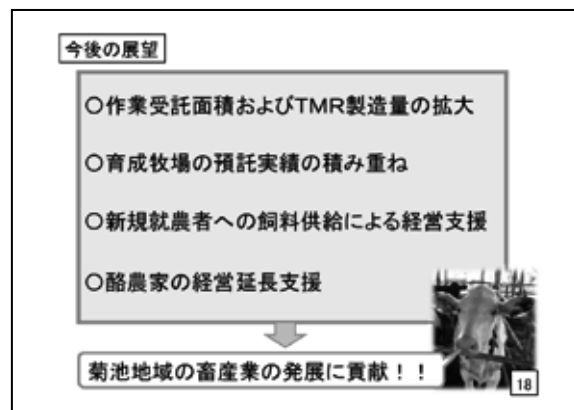
(休 憩)

○司会 それでは再開いたします。これからはパネルディスカッションでございます。進行はコーディネーターとして栗原室長にお願いいたします。よろしくお願いいたします。

【パネルディスカッション】

コーディネーター 農林水産祭中央審査委員会畜産分科会主査 栗原 光規

それでは、これからのパネルディスカッションの担当をしますコーディネーターの栗原



です。以後の進行は私がやらさせていただきます。よろしくお願いします。本日は4時までということで1時間15分ぐらいであります。皆様のご協力のほどをどうぞよろしくお願いします。

では、最初に、本日のパネリストの方をご紹介します。私の左手から、先ほどアドバンスの取組の詳細をご説明いただきました代表取締役の永田浩徳様でございます。よろしくお願いいたします。それから、コメンテーターとして本日3名の方をお願いしております。最初の方は、左手から順番にご紹介しますと、日本大学教授の小泉先生でございます。先生にはアドバンス様の現地調査にも参加いただいております。よろしくお願いします。先生には主に専門の農業経営の視点でさまざまなコメントをいただきたいと思っております。それから、お隣は生研支援センターにおきまして委託研究プロジェクト担当の研究リーダーを務めております大下先生でございます。先生は、北海道農業研究センターにおきまして、イアコンサイレージの生産、利用技術の確立などを通して、自給飼料活用型の大規模寒地酪農に係わる技術体系の確立に取り組んできた方でございますので、北海道のTMRセンターとの比較なども含めて、自給飼料の生産、利用の飼養管理の視点でコメントをいただければと思っております。よろしくお願いします。それから、一番奥になりますが、3人目の方は、熊本県北広域本部で農業普及・振興課の主幹を担当しております廣瀬先生でございます。アドバンス様がここまで発展してきた背景には地元行政機関の役割も非常に大きかったのではないかとと思っております。全国のTMRセンターの設立運営に取り組んでいただく多くの地域でも地域の行政機関やJAなどと連携した支援を受けているのではないかとと思っております。廣瀬先生には、地元の行政機関のお立場でどのような連携、支援をしてきたか、そのような視点からコメントをいただければと思っております。それでは、このメンバーでパネルディスカッションを進めてまいりますので、どうぞよろしくお願いします

パネルディスカッションを始めるに当たって、本日の進め方につきまして若干お話しさせていただきますと、まずは3名のコメンテーターの皆様から自己紹介を兼ねながら、それぞれの寄って立つ視点でアドバンス様の受賞のポイントであります3点、私が説明しました、高品質で安価なトウモロコシサイレージを利用したTMR生産と酪農家経営改善、あるいは地域連携による酪農及び和牛産業の振興、さらには女性の活躍、その他につきまして、アドバンス様の取組の特徴ある点ですとか、さらに発展するために必要な点などについて、質問なども交えまして、お1人、5分程度でお話しいただければと思っております

す。3名のコメンテーターのコメントをいただきました後に、永田代表からそれに対するご回答等をしていただいて、その後に、必要があれば、さらに質疑応答等の深掘りをしていきたいと思っております。また、その後に、総合的な論議としまして、アドバンス様のこのような取組を熊本県内ですとか、九州地域、引いては本州各地域に普及させていく上でのポイントなどについて、苦勞した点なども踏まえて意見交換できればと思っております。その後に、本日、この会場にお集まりの皆様方から永田代表あるいは3名のコメンテーターの方々に、こういった点はどうかという点等々につきまして、ご意見や、ご質問をいただければと思っております。

それでは、ご紹介させていただきました3名のコメンテーターの先生方から順番にそれぞれの自己紹介とコメントをしていただければと思いますので、よろしくお願いします。

○小泉（コメンテーター） こんにちは。私、小泉と申します。農林水産祭の中央審査委員会の経営分科会の専門委員を拝命しております。今回のアドバンス様と、あと、今日おいでになっているパストラル様、両方の現地調査をやらせていただきました。両者が天皇杯を受賞したということで、私も大変喜んでおります。おめでとうございます。

私、経営の専門ということでご説明するのですが、すでに栗原主査及び代表からもいろいろ説明があったのですが、簡単に説明させていただきます。

現在、我が国の畜産において飼料費の低減は非常に重要な課題であるわけです。また、中山間地域を初めとして、高齢化、あるいは後継者不足に対する対応は重要な政策課題になっているところです。そうした中で、自給飼料の生産の推進であるとか、あるいは畜産クラスター事業等の国の施策があるわけですが、その一つのモデルケースと言ってもいいかと思うのですが、アドバンスさんの国の施策の先をいくような経営が非常に頼もしいというか、モデルケースとして非常に挙げられるところと考えております。

まず、TMRの生産ですが、直近3年間の平均で10a当たり8,900kgで、非常に効率よく、ほ場自体は600筆で大変なところですが、それを農研機構の開発したGISシステム等を利用して作業の効率化を図っているところでございます。酪農家21戸が構成員となっているわけですが、員外の6戸を含めて27戸にTMRを供給しているところでございます。トウモロコシサイレージの栄養価についてはTDNが73%で、平均以上の品質と言えます。これをベースに豆乳粕であるとか、エコフィードの活用によって、かなり安価で高品質な飼料を提供しているわけですが、TDNあたりで、慣行飼料に比べて約25%から30%ぐらい安価な価格で提供できているところが非常に大きいところです。さらには、経営の関係

でいいますと、コストを下げて売上を高めることが重要なわけですが、この飼料によって乳量が大体10%程度以前より多く生産できているところもかなり大きいところだと思います。さらに、預託育成牧場、あるいは受精卵移植等で繁殖肥育体系を地域的に支援しているところも非常に重要な役割を行なっているところでございます。

経営的なデータでいいますと、単純な営利企業ではございませんので、普通の考え、経営的なとらえ方ではなく見ましても、利益率、あるいは固定長期適合率等、経営の安定性に関する数値も非常に問題はなく、経営が安定しているところがもう一つの大きな評価と言えるところでございます。

簡単ですが、これで私の説明を終わりにさせていただきます。

○栗原（コーディネーター） ありがとうございます。それでは続きまして、農研機構の大下先生からよろしくお願いいたします。

○大下（コメンテーター） ご紹介に預かりました農研機構の中の生研支援センターというところで研究リーダーをやっています大下です。よろしくお願いします。

今回、アドバンスさんの受賞、大変おめでとうございます。職員の皆様を初め、最初にご質問をさせていただきたいのは、アドバンスというお名前の由来を教えてくださいました。どのような理由でつけられたのかなということが一番気になりました。お名前のおとりに先進的にいろんな事業に取り組まれているということで、なかなか構成員20戸を束ねるのは非常にむずかしいと感じるのですが、そしてさらに新規事業も次々と立ち上げているところがすごいなと個人的には感じました。それで、もし何か皆さんを束ねるのに当たってご苦労された点とか、こういう方法でやりましたということがあったら、後ほどお聞かせ願えればと思います。

私は3年前まで、北海道に二十数年おまして、先ほど栗原室長からはご紹介のありましたイアコーンという、半分、濃厚飼料の代替利用を考え、実取りや雌穂利用について研究に取り組んでいたのですが、それより以前の研究では自給粗飼料であるトウモロコシサイレージや牧草サイレージの調製利用についての研究に取り組んでまいりました。アドバンス様がトウモロコシに着目された理由としては、収量性が高いことに加え、牛の嗜好性が高いことだと私自身は感じておりました。餌の影響というのは、直接的に牛に反映されるというよりも、間接的な効果なので、なかなか効果が見づらいところがあるんですが、ここ十数年トウモロコシサイレージの生産利用に取り組まれてきて、先ほど小泉先生からもご紹介があったように、乳量も上がってきているということをお聞きして、牛も良質な

飼料を食べることがすごく重要なのだということを証明していただいたと感じました。今まで飼料研究してきた者にとっては非常に心強いことをお示しいただいたなと感じております。

あと、今後の展開としていろんなことをされると思うのですが、やはり人手不足というところですね。審査の過程で女性の活躍という項目があることを私は今まで存じ上げていなかったんですが、多分、職員の方お二人いらっしゃると思うんですが、ますます女性をどうやって活かしていくのか、また、女性活躍と少し関連があると思うのですが、女性が使えるような技術、スマート農業、今、600筆のほ場を運営されていると思うのですが、ますますスマート化にも対応されていくかと思います。そのあたりでどういった展開を今、考えていらっしゃるのかをお聞かせいただけたらなと考えております。バンカーサイロの切り口、サイレージカッターで切られていると思うのですが、トウモロコシの場合には、やはり変敗とか、いい餌ゆえのいろいろな問題が出てくるのですが、あれを見せていただいて、立派だなと感じました。

以上です。

○栗原（コーディネーター） ありがとうございます。それでは、最後に熊本県の廣瀬先生からコメントをよろしくお願いいたします。

○廣瀬（コメンテーター） 熊本県県北広域本部農業普及振興課で畜産支援班長をしております廣瀬と申します。私、熊本生まれ、熊本育ち、農家の三男坊で、今はサラリーマン。妻、子供3人、5人家族で、乳製品、生乳、それから肉類の消費拡大に非常に貢献しているところです。牛乳は1週間に10本はなくなるなというところです。県職員になって20年ちょっと。畜産課が2回、8年間。振興局は11振興局あるのですが、そのうち、畜産が主力の球磨、菊池、このときは担い手支援班だったんですが、それから玉名、阿蘇の4カ所、そして今年度から菊池、2回目ということの勤務になります。私が、以前、菊池にいたときは平成21年からなので、このときはアドバンスさん、組織、工場も立ち上がったばかりで、まだ各酪農家の牛群とか、乳量のばらつきが結構あって、しょっちゅう、寄り合いとか、会議があつてご苦労をされていたなという記憶があります。

県北広域本部農業普及振興課では5カ年の重点普及課題、来年度が最終年度になるのですが、外圧に負けない、儲かる畜産の推進と題して、自給飼料関係、いろいろ推進しているところです。コントラクターとか、アドバンスさんのようなTMRセンター、それからキャトルブリーディングステーション、共同堆肥センターとか、こういう運営に事業が活

用できないとか、今後、組織をどのように進めていったらいいとかの相談対応であったりとか、新しい組織の立ち上げができないとか、勉強会を開いたり、そういうところに取り組んでいるところでございます。外圧に負けない、儲かる畜産の推進というのは、名前はいいですが、さすがに、ちょっと現在の外圧が厳し過ぎて、自給飼料が盛んな菊池地域でも、各農家等の運転資金関係の対応が増えて、クラスター事業とか、そういう投資関係が減っているのが現状でございます。ただ、菊池地域は畜産の新規就農もかなり多うございまして、新たな酪農家であったり、肉用牛農家であったり、もちろん既存の農家も独自のスタイルでみんながんばっているところでございます。こういうところを支えているのがアドバンスさんなどの地域の組織なのかなと考えております。

普及組織は、人とか、組織、これを育てていくのが課全体での一番の取り組みであります。普及でよく一丁目一番地はという話をするのですが、これが指導農業士であったり、アドバンスさんとか、キャトルブリーディングステーションさんという組織であったり、こういう組織をすごく大切にしております。というのも、これも後で話をしたいと思うのですが、うちは農業大学校とか、農業高校と連携して、学生の受け入れとか、研修の受け入れ、そういう人を育てるお願いもしているところでございます。多岐にわたる業績と思います。アドバンスさん、それから関係者の皆さん、今回は改めておめでとうでございます。今回、身近な優良事例として紹介させていただいて、管内、そして県内外へ普及活動に取り組んでいきたいと思っております。本日はよろしくお願いします。

○栗原（コーディネーター） ありがとうございました。それでは、今、3名のコメントターの先生方から、さまざまな意見ですとか、質問も幾つかあったかと思っております。小泉先生から、国の施策のモデルケースのような形でしっかり取り組んでいただいているということで、非常に高品質な飼料を使いながら、TDN単価で、通常の飼料から比べると、25%から30%ぐらいの安い生産費でありながら、非常に優良生産を挙げているということで、非常に高く評価できる取り組みであったということでした。一方で、アドバンスさん、その組織の性格上、非常に安定的な経営をやっているが、儲けをたくさん出しているわけではないということで、質問とすれば、アドバンスさんという形態として安定的に継続することと、それによって安定的な雇用等を継続しなければいけないと思うんですが、同時に、なるべく安価な飼料を農家さんに提供して、生産者、酪農家の経営も安定、向上させなければいけないという二つの問題を抱えながら仕事を進められていると思うんですが、その辺について後でお考えをお聞かせ願えればと思っております。

天下先生からは、端的にはアドバンスさんという名前、これはどんなふうな名前か、寄って立つ思想ですかね。会社の名前はやはり志というか、目指すべきものを明確に表したいという形で作っているかと思いますので、その辺の思いをお知らせいただきたいと思います。成果につきましては、これまでの先生の成果を踏まえると、いい餌をつくって、牛がしっかり食い込んで、その結果として乳量を上げていることは心強かったということで、これまでの研究者としての経験もこういうところで実証されているのではないかなという言葉をいただきました。また、今後の展開では、後継者不足という問題がありますので、どこの組織でもそうですが、女性の活躍をいかにしやすくするような形で組織を運営するかということがポイントになっているかと思うのです。これも農業生産組織だけではなくて、一般の民間企業等でもそこが重要なポイントになっていると思いますので、アドバンスさんのほうで、もしその辺につきまして現在考えているところがあれば、その辺を教えてくださいたいと思っております。

3人目の廣瀬先生から、地域とすれば、外圧に負けない、儲かる畜産の経営をとという形でしっかり取り組んでいるが、現在のような状況は非常に厳しい状況だと。ただ、そういう中でもアドバンスさんのような組織があることによって新規就農者が、アドバンスさんからもご紹介がありましたが、新規就農者が酪農に入ったということで非常に心強い。そういう意味ではアドバンス様がこういう地域にある存在意義をこの厳しい状況の中でも明確に示されたのではないかなということをお話しいただいたと思います。普及組織の一丁目一番地の役割としては人材育成ということで、アドバンス様には学生の受け入れ等々でご協力いただいておりますというお話もありましたが、その辺につきましても、これまでの取り組みの中で思いの糧がありましたら、幾つかご紹介いただければと思っております。

以上、3点、あるいは4点ぐらいにつきまして、永田代表からお考えをお聞かせいただければありがたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

○永田（業績発表者） どっちかといいますと、体育会系の元気ないい方と。女性という言い方をすると叱られるかもしれませんが、女性という感覚ではなくて、同じ仲間というか、やさしい女性ではなくて、元気のいい女性、農業には一番合っているかなと。汚れたりもしますよね。それを嫌がらずにちゃんとやっていけるし、逆にみんなをまとめてくれる部分も一番あると私は評価をしております。三十五、六歳の社員が固まっていて、それにちょっと離れた女性の先輩がおられて、子供さんが同じぐらいの年代という形なので話も合うし、今のところ、そういう形で女性の方が逆に引っ張ってくれているかなと私は思

っております。

人材育成のほうは、学生さんは県の農業大学から大体1年生か2年生になったときに畜産部の方が工場視察という形で来られておりました。その辺の受け入れは積極的にやっておりましたが、現在、コロナの影響で、こちらから何年か、農大の方に出向いて、会社の説明なり、求人のご案内なりしたのですが、なかなかそういうところではできなかった。しかしながら、会員さんの中に農大の実習という授業があって、そこを受け入れたりという形はあります。農大だけではなくて、先日、私のところは岡山の酪農学園大学からも実習に来られていた。熊本に帰って農業関係の就職をしたいというところで来られていて、アドバンスもいいよという話はしましたが、うちには来てくれませんでした。うちも、あと1人、2人ぐらい、職員がいていただくと助かるのですが、今のところ、いっぱいいっぱい頑張ってもらっております。

○栗原（コーディネーター） 永田様、ありがとうございました。いろんな問題について詳しくお答えいただきましてありがとうございました。いろんなことがアドバンスさんの成功の要因かなと思いますが、いろいろお聞きしていて、共通的なキーワードとして、昔だと、いろんな組織にすごい強いリーダーがいて、その人の後について来いというような形が多かったかなと。当然、今でもそれは必要だと思うのですが、今、お聞きしていると、これまでも何代もの代表の方がそういう性格を持っていらっしゃるんでしょうが、それだけではなくて、やはり組織内、地域内の連携を常に意識しながら、人の話をよく聞きながら物事を進めている、そういう印象を私は持たせていただきました。それだけではないと思いますが、一つのキーワードとしてそんなことがあったのではないかなと、今、お聞きしていて、アドバンスさんの会社の経営と農家さんの経営が車の両輪で、片方がよいだけではよくないので、意思疎通をよくしながら話を進める、そういうような連携をしっかりとしながらということでしょうし、女性の方に活躍していただく意味でも、男女関係でなくて、お互い意思疎通をしながら、それぞれの得意な分野をしっかりとやっていくというふうな連携をどう進めるかというお話でしたでしょうし、人材育成につきましても、若い方々を積極的に、コロナの状況とかいろいろあって、一時中断しているところもあったかもしれませんが、門戸は常に開いていて、そういう方との連携も常に意識しながら、可能な形の協力をしていく、そういうウィングの広い、いろんな取り組み、それが今の成功につながったのではないかなと考えております。

これは私の印象でしたが、それでは、次は、総合的な意見交換として、アドバンスさん

は非常に重要で、いい役割を地域で果たしていращやるのですが、こういう取り組みをさらに発展させる上での課題とか、対応で苦労した点等について深掘りをしていきたいと思います。この取組をさらに熊本県内、あるいは九州地域、引いては本州各地域に普及させる上でのポイントを意見交換できればと思っております。最初にアドバンスさんには多くの視察者がいろんなところから訪問している。コロナで一時期下火になったことはあろうかと思いますが、また増えているというお話を聞きました。その際、視察者の方々にアドバンスさんの取り組みが成功しているポイントですとか、課題についてお話ししていれば、その辺をちょっとご紹介いただければ、今後、皆様が同じような取り組みをする上で参考になろうかと思しますので、よろしくお話ししたいと思います。急で申し訳ないですが、よろしくお願いします。

○永田（業績発表者） その件ですが、何年も施設をつくるという形で来られておったところがありまして、そこは組合が来られていたんですが、何回も、何年も来られるので、「農家さんですか。組合さんですか」というと、農家で作れと言うから、組合の方が視察に来て、見て、帰ってから作ろうという形の流れですね。「そういうのはやめたほうがいいですよ。しないほうがいいですよ。失敗しますよ」と。アドバンスの場合は農家で作って、口約束ですが、やめるときは酪農をやめるとき以外はないと。その覚悟がないと、組合とかが作った場合、組合員が要望して作って、今度は組合員が合わないという形で去っていきますよね。別のやり方をやる。でも、組合にはその施設が残ったまま。そういう無責任ではないですが、そういう覚悟があると、みんなで相談して、いい餌を作ろう、安い餌を作ろうと。安い餌に走っていったときに、こっち側の農家さんから「餌を変えないでくれ」と。余り安いほう、安いのがあったら、こっちを使ってというやり方をやると、牛がいつまでたってもその餌に慣れないという形で、さっきも言いましたが、青年部とか、同志会とか、牛に熱心な方がおられると、牛がまず一番ですので、そういう形で餌を変えないでやっていこう、それをお願いしますというような要望もあります。そういう形でいったほうがいいのではないかなと。口約束で、やめない限り、やめることはできないよという覚悟でみんな入って、そこが逆によかったかなというところですね。

○栗原（コーディネーター） ありがとうございます。設立のときの体験を踏まえた貴重なアドバイス、ありがとうございます。

では、順番が逆になりますが、そういうアドバンスさんの取り組みを地域で支援していただきました行政の立場としてアドバンスさんの成功したポイントですとか、さらに広め

るための課題等について何かありましたら、廣瀬先生からご紹介いただけると非常にありがたいと思いますので、よろしくお願いします。

○廣瀬（コメンテーター） 私からはTMRセンター立ち上げにつながったコントラクターから少し話をしたいと思います。菊池地域でコントラクターが発展した理由が幾つかありまして、竜門ダム関連とか、土地改良、そして農道、インフラの整備がされて、大きなトラクターとか、6条刈り、8条刈りのコーンハーベスター、これが導入されて使用されるようになった。先ほども言われたとおり、菊池市と旭志と泗水が合併して、特に旭志地域は酪農家のリーダーがおられて、JAさんの支援のもと、平成8年にいち早く旭志のコントラクターを立ち上げることができた。このコントラクターが真に必要であったのかなと、今も続いておりまして、20年以上も続いている状況。この続いているというのが、アドバンスさんも同じですが、大事なのかなと。もちろんJAさんとか、県酪連さん、それから市長さん、こういうバックアップがあったこともあります。そして、そのほかの管内、七城、泗水、合志、菊陽、こういうところも、一、二年後、追従して、コーンの受託組織が立ち上がっていったという状況です。企業体の酪農家が個人で機械を入れたり、機械メーカーが一度受託組織を立ち上げ、撤退されたとか、そういう事例も過去はあります。

さっき経営改善の中で見えない部分と社長がよく言われていたのですが、私が入庁したころ、この地域の酪農家の奥様方、女性部の方からよく聞いた話は、やはりコントラができて楽になった、熊本の蒸し暑い真夏の中でタワーサイロとか、これのサイロ詰め、それからみんなに飯を作って、食べさせて、搾乳させて、糞を出してと、本当に頭が下がるようなところですが、こういうところ、奥様に「楽になったな」と言わせるところ、これが一番の経営改善なのかなと私は思います。

本題のアドバンスさんの話ですが、自給飼料型のTMRセンターというのはやはりコントラクターが発展したスタイルかなと思います。二期作のサイレージ体系が定着していないと、やはり地域で協力してとか、もう一つ、農地を利用してとか、こういう考え方がないと、TMRセンターの設立はなかなかたどり着けないかなと思います。その延長で、飼料、トウモロコシの所有権であったり、農地の管理とか、地元の調整、整理ができたこと。休耕地の管理とかも酪農家には非常に大事です。それから土地問題、地権者の意見というのも非常に反映されるので、いろいろむずかしいところもある。さらに農村の景観維持の中で、畦草切り、これも非常に重要。こういう地元といいますか、地域社会でとても大事になっている。こういうところかなと。

あと、話がちょっとずれたのですが、経営改善というところで農家渡しの価格が抑えられているところと、利用農家が技術経営を高いレベルで維持できているところ。それと、最後に社長からも話があったとおり、TMRができたから、奥様方が楽になったことで、ここもTMRの大きなポイントなのかなと思っております。現在、酪農行政が厳しい中も、こういう外部組織のバックアップが近くにあることが、うちの管内の農家の強みだと思っています。

○栗原（コーディネーター） 廣瀬先生、ありがとうございました。では、次に自給飼料の生産、利用等の専門家の大下先生から、こういう取り組みを全国に広めるためのポイントについて、ご意見をよろしくお願いします。

○大下（コメンテーター） 先ほど代表からお聞かせいただいた覚悟を持ってやることということはすごく重要なことだなと思いました。北海道にも農協主導のTMRセンターもあれば、民間が経営しているTMRセンターもあります。たまたま民間のところにお邪魔する機会があったのですが、その経営者の方もわれわれは覚悟を持ってやっているということを強調されていました。そして同様に構成員というか、餌を配給している先の経営も考えつつやっていかなければならないという視点も同じで、巡回等の対応もされているということを今回のご発表でお聞きして、経営のいいところはそういうことをやられているのだなと感じました。、また、情報交換がすごく重要だとおっしゃったのですが、関係者の皆さんが情報共有すべきと考えているところがすごく重要だと思いました。農業経営そのものについては私は専門ではありませんので、そのあたりは小泉先生がお話しになると思うのですが、どのような仕事でも、仕事をしていく上で考えながら行動するというのがすごく重要な観点かなと強く感じました。

自給飼料の研究に携わってきた者として一つお願いというのではないですが、やはり土地利用型だと思うので、地域の土地をフル活用していくことを考えますと、耕種側との連携とかも多分考えていくことになると思うのですが、そのような場合は最終的にはそれを生産する総体的なコストがどのくらいかかるかというのがこれからのサステナブルということを考えていくと、畜産を考えても、今、燃料費もすごく上がっていて、輸送コストも上がっているんで、地域で作るということのメリットが大きく出てきていると思いますので、このきっかけを無駄にというか、今までの買い餌を買うのではなくて、できる範囲で自給できるものは自給して、多分、酪農の場合は素飼料をまず確保しなければいけないと思うのですが、そういう体制でやっていただければなと考えているところです。

○栗原（コーディネーター） ありがとうございます。それでは、最後になりますが、農業経営の専門家として小泉先生から、このような取り組みを全国に広める意味でポイント、あるいは考慮すべき事項等について何かございましたら、教えていただければと思います。よろしくお願いします。

○小泉（コメンテーター） 今回、アドバンスさんの取り組みは、やはり酪農家なり、地域の畜産業の持続性向上ということで、負担軽減であるとか、省力化を図っているところですが、実際に問題となるのは、高齢化、あるいは後継者不足の中で、今の取り組みによって後継者が増えるのか、あるいは今回、新規就農者が出てきたということですが、今、経営している経営者のところで持続的に経営が進んでいくのかどうか大きな課題であると思うんです。その辺が実際どうなのかということ。これは畜産だけではなくて、地域の循環型農業を考えた上で、一つのピースが抜けただけで全体がつぶれてしまう可能性がある。そうした地域の中での中心的な役割を担っているわけですが、実際的に人材的な問題でかなりむずかしいとは思いますが、何か展望があればちょっと伺いたいと考えたのです。これは全国的な課題かと思うのです。

○栗原（コーディネーター） ありがとうございます。アドバンスさんのほうで何かあれば。ちょっと大きな問題で、急で申し訳ないですが、よろしくお願いします。

○永田（業績発表者） 旭志だけではなくて、菊池地域全体の中でも後継者は全国的に見ても非常に多い地域と伺っております。アドバンスができたことによって、アドバンスの会員さんの後継者もそのままアドバンスの形態の中に入ってきて勉強していく。先輩方が言われていたのが、アドバンスを作って、入って、5年、もしくは10年ぐらい長くできるぞと。うちは後継者がおらんから60ちょっとでやめようと思ったが、餌とか、そういう作業面が軽減できるので、六十七、八ぐらいまでできるぞというような話もされていたことを、今、話を聞きながら思ったのです。後継者は本当に多いほうだろうと思います。現在でも一番若い会員さんは高校を卒業して実習に行っている間にお父様がなくなられた。18、19で帰って来て、そのまま就農された人が一番若くて、それから5人の後継者はアドバンスの中で育ってきている。お父さんと経営をやっているような形で、わたしのところは経営も代わって、息子に譲ったという経緯があります。後継者はよそに比べると多いし、やはり仲間が多いと後継者もやりやすいのかなと。わたしたちもそういうふうな感じでしたので、今の子のほうが逆に意欲のある後継者が多いかな、そういうふうに思います。

○栗原（コーディネーター） ありがとうございます。なかなかむずかしい問題ではあ

りますが、いろいろお話を聞くと、やはり重要なのは、アドバンスさんも最初から肉用牛から何からみんな一緒にセットになったわけではないので、最初から全部はなかなかむずかしいでしょうが、まずはやり抜くんだぞという仲間を核として、そこを上手に行政の方が支える。その際に広がりを持って、核となる組織と周りとの連携ですとか、調整。農家間のやりとり、調整、畜産農家と、場合によっては子牛農家、作物が違ったりすると、意思疎通がなかなかむずかしい面があったりすると思いますので、土地の調整ですとか、いろんな部分では行政の力は大きかったのではないかなと思います。そういういろんな経験を視察の方が来た時にはぜひともお伝えいただいて、この取り組みを色々なところで参考にしていただける様に対応していただければ非常に有り難いなと思いました。ありがとうございました。

それでは、折角こういう機会ですので、会場でご参加いただいている方々も幾つかご質問をいただければと思いますので、積極的に挙手をよろしく願いしたいと思います。どなたでも結構ですが、ございませんでしょうか。所属とお名前を最初にお話しただいてご質問いただければと思います。よろしくお願いします。

○会場 農業技術課の木庭と言います。ちょっとずれるかもしれませんが、トウモロコシが被害が非常に多くて、写真を見たところも、電気牧柵とかを張っていないし、さっき地図にあったところも、倉岳の麓あたりまで飼料作物を作っていたらいいんですが、こういった地域全体で取り組まなければいけないようなバックアップ体制があるんでしょうか。

○栗原（コーディネーター） では、このご質問について。獣害は多分全国で大きな問題になっていますので、トウモロコシとなれば、イノシシにしろ、鹿にしろ、非常にいいターゲットになっていますので、そこら辺の悩み、確かに語られていませんでしたので、どんなふうに対応されているのか、あるいは問題なく進められているのか、そんなことはないような気がするんですが、よろしくお願いします。

○永田（業績発表者） イノシシはいます。だんだん下のほうに下ってきております。電柵もみんなで何日に電柵をしようという形で、刈り取り前の2週間ぐらい前から電柵をして、畦の草を切って、電柵をして、除草剤をまいてという形でやっております。電柵をすると、入りづらいという形ですが、逆に早く作った畑ほどイノシシが悪さをするんですよ。そういう畑はそのまま餌場として放置をしております。じゃないと、そこを封鎖したら、また隣の畑に行ったりということがありますので、何年も刈り取りしない畑が山付きのほうにあります。狭い畑なので、ここで食い止めようという形、やり方ではないんです

が、しょうがないからそういう形を取っている。ほかの農家さんはちゃんと電柵をされており、しかし、年じゅうしていると、草がつくと、やはり電気が流れづらいという形で、畦にずうっと除草剤をまくのですよね。そうしたら、畦が弱くなって崩れて非常に問題になります。うちあたりでやっているのは、刈り取り前に、出る畑は大体予想がつくので、各農家に何日にみんなで電柵をしますので情報をくださいという形で、あそこに出るといったら、そのときにみんなで一緒に一遍にします。それと、個人的ですが、私も3年前ぐらいに「わな」の資格を取りました。まだ一匹も捕れません。素人が箱穴を作って仕掛けてもなかなか捕れません。そういう工夫は酪農家でいま8名ぐらいは資格を取って、みんなで勉強しようよという話にはなっています。最初は4人ぐらいで行ったのですが、ご存じのとおり、天草の農家ハンターさんのところに勉強に行ったり。農家ハンターさんも、これは地域でやらないと、個人でもやっても何にもならないよと。隣の畑に追いやっただけの話だと。しかし、資格を取ったので、話がわかるのですよね。専門用語とかを言われてもわかりやすかったので、非常に勉強になって、1時間の予定が3時間ぐらいいて、一生懸命話を聞いて、持って帰って、しようとしても、またコロナだったり、酪農家は収穫が終わると、イノシシが畑に入っても全然問題がないので、そういう流れがありますね。イノシシは大変多いです。鹿も多いです。うちのところはJ A菊池の本所の真上ですが、うちにもイノシシがいたと言われたし、サルもいます。今のところ、鹿も、サルも、そうびっくりする被害はないですが、トウモロコシにはイノシシが一番悪いですね。

○栗原（コーディネーター） ありがとうございます。では、ほかにもうお1人ぐらいございますでしょうか。

○会場 畜産研究所の北浦と申します。本日は貴重なご講演ありがとうございます。アドバンスさんはまだ今後も面積が増えていくのかなというところでお話を聞いていました。また、後継者の方もいないところとか、またアドバンスさんに耕してほしいという話も出てきたりするのかなと思っていますが、アドバンスさんは人間的なところもまだ1人、2人は増やしたいというお話をされていらっしゃったと思うのです。作業の軽減というか、ロボットトラクターとか、自動ソーラーとかを使うことを考えていらっしゃるかということ。あと、今、お話を伺っていると、トウモロコシがメインで、売上が上がっているということで、その理由はほとんど原材料のお値段が上がっているところだと思うんですが、価格高騰の要因となっているその他の飼料、青刈りトウモロコシ以外の子実トウモロコシですとか、牧草のイタリアンライグラスとか、そういったところも増やしていかれる予定

があるか伺えればと思いますので、よろしくお願いします。

○栗原（コーディネーター） では、永田さん、よろしくお願いします。

○永田（業績発表者） 私個人としては、トウモロコシ以外は作りません。作らない方向で進めていっています。立ち上げのときも、今まで、各自、イタリアンを作って、ワラをかじめて、トウモロコシをやったというような形の酪農がほとんどだったと思います。そういう中で、イタリアンの機械が必要になる、トウモロコシの機械も必要になる。それよりも一本化したほうがいいのではないかというところで、トウモロコシならば、コントラクターに委託すれば収穫できる。イタリアンならば、また別の団体に頼むのか、自分たちでするのか。それと、天気もあります。現在ではちょっとイタリアンを作っても、畜産の多いところなので畑が非常に肥えております。いいイタリアンは取れません。硝酸が少し出るかなというところで、そっちは手を出さない思いです。それと、スマート農業という部分は、畑が狭くて、そういう部類ではないかなと思うし、面積の拡大も、今のバンカーサイロ、1本に大体35町ぐらい入るので、今で目いっぱいです。今以上に面積を増やすと、逆にイノシシが出るところとか、山付きだったりとか、道が悪いとか、そういうところは逆にだんだん作らなくなってくるのですよね。そういう人に広い畑だけ貸してとも言いづらいし、面積的には今がいっぱいかなと。会員さんもおのずからその面積でいっぱいというところで、現在の人数でちょうどいいかなというところでは。

○栗原（コーディネーター） ありがとうございます。スマート農業につきましては、報告にもありましたように、早い段階から土地の管理ではICTを使った形で効率的な土地管理、そのデータに基づいた作付け管理等々を行なっているのも、そういう意味では先進的にまずスマート農業技術のお金のかからないところから入っている。それも、手前味噌ですが、農研機構と連携してやっていただいているということで非常にありがたいなと感じています。

まだまだ会場からも色んなご質問があろうかと思いますが、私の進行が悪くて時間が進んでしまいました。

これからは、最後のまとめに入っていきたいと思います。本日は永田代表からお話をいただき、また様々な意見にお答えいただきました。このことに対して、3名のコメントの先生から、会場に参加の皆様、オンラインで参加の皆様にメッセージを込めて最後にお話をいただければと思っております。永田代表には最後ということで、最初の順番で小泉先生からよろしくお願いしますと思います。1人、二、三分で、申し訳ありま

せん。

○小泉（コメンテーター） 最初のほうにも言ったのですが、アドバンスさんは国の施策に則ったと言うとおかしいんですが、非常に先進的に、本当にモデルケースとなる経営を実施しておられるので、行き先というか、これからの将来の進展ぐあいも注目に値するのかなと期待を込めて注視しているところでございます。

○栗原（コーディネーター） ありがとうございます。続きまして、大下先生、よろしく願いいたします。

○大下（コメンテーター） 今日はこういう会合に参加させていただいて、私は北海道が長かったので、九州の状況について大変勉強になりました。ただ、やはり共通するところがたくさんあるし、将来、後継者がたくさんいるということがすごく心強いと思いますので、その方たちを育てて、ぜひわれわれが毎日飲める牛乳を生産していただけると大変ありがたいと思いますので、よろしく願いいたします。

○栗原（コーディネーター） ありがとうございます。それでは、最後に廣瀬先生からよろしくお願いします。

○廣瀬（コメンテーター） ちょっとしゃべり足りないところもありますが、菊池地域は農地関係がほかと違って、余り余っていない状況でして、さらに今、大企業さん、T S M Cさんも入ってくるところで、農地関係とか、雇用関係とか、次に向けたすごく大きな課題が待っている状況があります。あとは、すぐですが、基盤強化法も改正があって、令和7年度から農地バンクにすべてを通すことになって、その前に計画を地域で立てていかなければいけないところで、そこに力を入れていくのも大事なところと考えているところです。あと、税制関係も変わって、インボイス制度もされて、先ほど出たコントラクターとか、そういう組織の体制も今後考えていかなければいけない。それから物流の24年問題とか、コスト関係、さらに餌代、生産コストに乗っかってくるのではないかなと。酪農家が一番厳しいときにこういう改善の話を進めていかなければいけない。たとえば菊池のほかの地域でTMRセンターを新しく立ち上げましょうという話になったときに、意見がまとまって、いざというときには、事業関係も利用して、普及としては安定するまで寄り添っていかなければいけない、そういう感じであります。うちとしても、課題といいますか、地域のみんなでやっていくという課題、この辺、山盛りですが、一生懸命考えて、知恵を出して、連携して乗り切っていきたいなと考えております。知事も言われます「ピンチをチャンス」という、この切り札が自給飼料型のTMRセンターなのではないかと考えており

ます。

○栗原（コーディネーター） ありがとうございます。直近の問題、これから進むべき方向についてもまとめていただきましてありがとうございました。それでは、ここで永田代表から、会場参加の皆様方、オンラインでの多数の参加の皆様方に最後にメッセージがありましたら、一言よろしくお願ひしたいと思います。

○永田（業績発表者） 本日はこういう場所に立たせていただいて本当にありがとうございます。受賞してからいい経験ばかりさせていただいておりますとともに、なかなか慣れないことで大変さを毎日感じております。今、私たちがアドバンスで天皇杯を受賞したということで少し持ち上げられている部分があるかなと思いますが、これはJ A菊池の職員の皆さん、菊池市の職員の皆さん、県の皆さん、国の皆さんの知恵を借りて、話を聞いて、一緒になって進んできたのが今ではないかなと思うのですよね。飼料会社の皆さんや、関係している皆さん方に本当にありがたく感謝をしたいと思います。今後ともよろしくお願ひします。ありがとうございます。（拍手）

○栗原（コーディネーター） 永田代表、どうもありがとうございました。

それでは、最後の最後になりますが、コーディネーターの栗原として一言まとめさせていただきます。本日は皆様のご協力のおかげで非常によいシンポジウムになったと感じております。本当にありがとうございました。現在、皆様ご存じのとおり、従来から言われている畜産の経営者の高齢化や後継者不足という問題に加えて、先ほど来、いろいろありましたが、飼料やいろんな資材の高騰というよりは、いま暴騰かも知れませんが、そういう中にありながら、牛乳の消費量は伸び悩むという問題があつて、酪農経営はかつてない厳しい経営環境に置かれていると感じております。そういう一方で、乳製品の輸入は継続しておりますし、また、攻めの農業ということでは畜産物、特に牛肉の輸出の拡大に対する期待はこれまで以上に高まっている状況があります。このような環境の中でアドバンス様のように耕作放棄地を含む多数の農地をトウモロコシの二期作という形でフルに活用する。また国内の未利用資源でありますエコフィードもフルに活用することで、高品質で低価格な自給飼料中心のTMRを製造して畜産農家へ安定的に供給し、飼養管理指導により生産というものは、ウクライナの問題等もあつて、食糧安全保障の重要性が強く叫ばれている昨今、ますます重要で全国の模範となる先導事例と言えらると思っております。また、同時に、乳牛の育成牛を活用した積極的な黒毛和種肥育素牛生産は地域の和牛生産農家の生産基盤を支えるとともに、我が国の和牛の牛肉輸出拡大につながる模範となるものであ

ったと感じております。また、これらの取り組みは農林水産省の施策を先取りするもので、農林水産省の施策におきましても常に紹介されている取り組みでありました。

以上のように、今年度の畜産部門の天皇杯受賞者であるアドバンスさんの取り組みは地域の酪農生産者、和牛生産者の生産基盤を支える先導事例ですので、今後、アドバンス様には、すでに増えているとお聞きしていますが、視察者がどんどん増えるのではないかと思います。そのような方々に対して模範事例を丁寧に紹介していただいて、全国の多くの地域にこのような取り組みが普及拡大していくようなご尽力、ご協力をいただければ、天皇杯の成果の発展形という形では理想的であると楽しみにしております。

永田代表にはご苦勞をおかけするかと思います、この点、よろしくお願ひしたいと思っています。

最後にアドバンス様の永田代表を初め、3名のパネリストの先生方、非常に有益なコメントをありがとうございました。また、会場、あるいはオンラインでご参加いただきました皆様、本日、ご協力のほど非常にありがとうございました。感謝の意味を込めまして拍手で終了したいと思います。どうもありがとうございました。（拍手）

○司会 演壇の皆様、有意義な意見交換、誠にありがとうございました。また、会場からも積極的に発言していただき、そしてオンラインの参加の皆様方も誠にありがとうございました。

閉会に先立ちまして、冒頭ご挨拶にありましたように、本日は本年度の多角化経営部門で天皇杯を受賞されました山鹿市の株式会社パストラル代表取締役の市原さんにもご参加いただいております。せっかくですので、一言ご挨拶をいただきたいと思いますので、ご登壇をください。なお、参考までに会場には「新しい里山農業のカタチ」という冊子も配っておりますので、参考にいただければと思います。それでは、市原様、お願いいたします。

**【天皇杯受賞挨拶】 令和4年度農林水産祭多角化経営部門天皇杯受賞
株式会社パストラル 代表取締役 市原 幸夫**

皆さん、こんにちは。山鹿市から来ましたパストラルの市原でございます。先だって冊子を皆さんに配布させていただいております。この写真は私の3人の息子とそのパートナ

ーです。下のほうに1人霞んでいるのが私でございます。息子たちは東京に出て、パートナーと出会い、全員Uターンして帰ってきました。今、孫が9人ですから、今の国が異次元の少子化対策をやっていますが、とうに先取りをしています。当社は平成9年に里山の規格外の農産物を使ったご当地アイス製造からスタートしております。今日、話がありましたように、牛乳は小国のジャージー牛乳を年間10tぐらい使っています。ですから、酪農さんが立ちいなくなると、われわれも立ち行かなくなるのです。そしてアイス作りから十数



年たったら、中山間地の農業は急激に衰退が始まりました。我々が立っている土俵というのは中山間地なのです。ですから、アイス加工屋ですが、実際、農業に参入して、一次産業の価値が本当にできないかどうかというのを自分たちでやってみようということで、十数年前に菊鹿町というところに新規就農しました。合鴨同時水稻作や、栗、ワイン用ブドウ栽培をやりました。今、アイガモのお米は1俵4万で売っています。品物が足りないですね。慣行栽培米は一等米で12,000円です。だから、一次産業でも価値は作れるということを実証したのです。

次は、農産物というのは相場なんですね。私は相場がどうしても納得できなくて、アイスを作っているときに製造原価があるのですが、製造原価を割って売るとは、即、会社は倒産です。なぜ一次産業の人たちだけが生産コストを割って売なのかということがどうしても納得できなかった。それで、次は生産加工販売の六次化をやろうということで、フランス菓子のお店を作りました。栗を農家から固定価格で買う。そういうことで、実際、フランス菓子をオープンしまして、非常に成果が出たのです。

その次は、全国の里山には農産加工組織が何千とあるのです。今、これが高齢化でどこも行き詰まっています。それで、若い世代が農産加工組織の事業再生できないかと考えました。菊鹿町のあんぽ柿を作っている加工グループの会長さんは85歳です。どうしても存続できない、どうにかならないかということで、事業承継しました。私の息子たち夫婦は30代です。彼らがその事業再生に取り組んでいます。もしこれができれば、全国の農産加工組織の再生モデルになるということでやっております。次が、里山には放置された杉山

がたくさんあります。ある人から「市原さんは里山活性化に取り組んでいるが、この杉山には手を出さないのか」と言われました。私は林業に詳しくなかったものですから、本を読んで調べたら、今、現状は山主にお金が入らない仕組みになっています。流通業者は利益を確保しているのに山主にはお金が入らない、これも農業と一緒にです。だから、いろいろ考えた上で、家を建てる施主が直接山主から原木を買いつけて建てるというプロジェクトを一昨年立ち上げて、そのモデルハウスが今年の9月に竣工します。

それともう一つ、今度3月には阿蘇くまもと空港がリニューアルオープンしますが、その3階滞在型ゲートラウンジにパストラルゾーンを作っています。これは空港直営店になります。今、空港商業も非常に厳しくなっていて、地域連携とか、地域創世と絡んでいかなければ存在価値がなくなるだろうということで、我々の取組みがスタートしました。

私たちは山鹿で暮らしています。山鹿の価値を上げるために、農業を起点とした小さな事業をクラスター状につなげて、いろんな人と取組みをスタートしています。交流人口が増えれば、Iターン、Uターンも増え、これからの地域創生の一つのモデルになるのではないかと考えています。

里山農業は後継者不足と言われるが、不足ではなく不在です。後10年したら、現役の70代、80代がいなくなるから、農業持続がとても厳しくなります。だから、一つは里山農業の価値をどうつくっていくかというのが私たちの挑戦だし、それを息子たち、孫たちに継承して行って、新しい地域を作っていきたいと思っています。

以上でございます。ありがとうございました。（拍手）

○司会 市原様、非常に貴重なお話をありがとうございました。

それでは、以上をもちまして、優秀農林水産業者に係るシンポジウムを終了いたします。本日の結果は、後日、内容を整理した上で、ほぼ全文を私ども当協会のホームページにアップいたしますので、今後の参考にいただければと思います。

また、来月の3月6日、むらづくり部門のシンポジウムを長野県の上田市で開催いたします。こちらでもオンラインで視聴できますので、関心のおありの方は視聴していただければと思います。

なお、お帰り際には、簡単なアンケート用紙をお配りしておりますので、ご記入の上、受付にお渡しいただくようお願いいたします。オンライン参加の方はズームから退出されると、アンケートの記入画面に切り替わりますので、ご回答をよろしくお願いをいたします。

す。

以上でございます。本日はまことにありがとうございました。（拍手）

（閉会）

令和4年度（第61回）農林水産祭

（第32回）「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」

（地域域畜産業の基盤となる大規模自給飼料生産・活用型TMRセンター）

発 行 令和5年4月

編集・発行 公益財団法人 日本農林漁業振興会

〒104-0045

東京都中央区築地3-12-5 築地小山ビル4階

TEL (03) - 6441-0791 (代)

FAX (03) - 6441-0792

URL <http://www.affskk.jp>

本資料に掲載の記事、写真の無断転載を禁じます。